

嘘の効用

渡辺 幸俊

(相模女子大学専任講師)

何か、とってつけたようなタイトル…「嘘の効用」。果たして、「嘘」には効用があるのでしょうか？嘘とは何でしょうか？仮に嘘がなく、真実のみが満ち溢れるような世界がこの世に現出していたら…。人によっては、「それこそ理想の世界」と、おっしゃるお方もいらっしゃるでしょう。ですが、筆者にはそうした「理想」の世界は願い下げであります。厳しい「真実」を前にしては、弱い私達人間は無力な存在となってしまうのではないのでしょうか。厳しい現実の世界から一時逃れるためには、そこに「悪意の無い嘘」の存在が不可欠のようにおもわれるのです。

一体、「嘘」なる言葉、概念を生み出した人は誰でしょうか？「真実」という言葉が存在する限り、それに対立する概念である「嘘」もまた存在するわけであります。嘘があって初めて真実が存在するのか、真実があって初めてそこに「嘘」の出番が巡ってくるのか…。こうした議論の行き着く所は、どうやら「ニワトリが先か、それともタマゴが先か」ということになりそうであります。

考えてみると、この世はまさに全て二律背反の世界であると言えないでしょうか？そうであるが故にこの人生は楽しいのでは…。"No good without evil."そして"No light without dark."なのであります。相矛盾するものが両極に存在するからこそ、人生は豊かなものとなっているのであります。日本語にも、「嘘から出た真実」などという「ウーム、成る程」と、思わず実人生で唸りたくなるような含蓄に富んだ表現が存在します。これを地でいったワイルドの作品が「真面目が大切」というものでしょう。これを逆手にとれば、「真実から出た嘘」というものも在りうるのではないのでしょうか。「真実」を伝えるために、心ならずも「嘘」というオブラートに「真実」を包み込み…これはよくあることなのでは…。とかくこの世は住みにくいのであります。「真実」とはそれだけに扱いにくいものなのであります。「真実」一本でこの世が存在するなどと考えるお人は、必ずやその「真実」に復讐されることになるのではないのでしょうか…。一昨年公開された映画「バイオレント・サタデー」(原題"The Osterman's Weekend"には、この「嘘」と「真実」の関係を的確に言い表した"The truth is a lie that hasn't been found out."("真実とはこれまでバレることのなかった嘘のことだ")という思わずニヤッとする台詞が聞こえてきました。何か、筆者には、ワイルドが現代に甦れば、言いそうな言葉に聞こえたのであります。